生起から出来事へ
——ハイデガーとドゥルーズにおける
Ereignis／événement

佐藤嘉幸

「ハイデガーとフランス思想」[1]という主題から出発して私たちが論じたいのは、ハイデガーにおける「生起＝出来事 Ereignis」という概念が、フランスの構造主義、ポスト構造主義思想の中にどのように密輸入され、新たな概念へと生成したか、という問題である。私たちはいま「密輸入」という言葉を用いた。それは、構造主義以後のフランス思想の中に、ハイデガー的概念がそう名指されることなく引用され、さらにはまったく新たな概念へと作り変えられてしまう、という極めて多く見られる事態を指している。例えば、デリダによって鍛え上げられ、彼の思想を要約するものとみなされている「脱構築 déconstruction」という概念は、そもそもハイデガーが『存在と時間』以来用いている「解体 Destruktion」という概念に由来している[2]。また、ラカンが「主体の脱中心化」と言うとき、その概念はハイデガーの「脱在 Ex-sistenz」と深い関係を持っている。さらに、フーコーの『言葉と物』（この本の中でハイデガーの名前は一度しか挙げられていない）は、実はハイデガーのカント読解(『カントと形而上学の問題』)がなければ存在しないと言ってもよいほど、ハイデガー的残響を深く宿している。フランス思想、とりわけ（ポスト）構造主義的思考におけるこうしたハイデガーの「密輸入」の一つの代表的な例として、私たちは「出来事 événement」という概念に注目してみたい。「出来事」概念は、アルチュセール、フーコー、ドゥルーズ、デリダなど、構造主義、ポスト構造主義の代表的思想家たちによって用いられている。中でもとりわけドゥルーズは、『意味の論理学』（一九六九）によって出来事の哲学と言うべきものを確立した。またそれ以後の世代で言えば、アラン・バディウが、ハイデガーとドゥルーズを意識しつつ大著『存在と出来事』（一九八八）を著している。紙幅の関係上、私たちはここで「出来事」の概念について多くの思想家の事例を扱うことはできない。本稿はまず、ハイデガーにおける「出来事」概念の意味と賭金とを確認したうえで、それをドゥルーズがどのように受け止め、新たな概念へと鍛え直したかを簡潔に考察する。

1．ハイデガー／Ereignis

ハイデガーは一九六二年の「時間と存在」というテクストの中で、「出来事」の概念を提示している。私たちがここで「出来事」と訳した言葉は、ドイツ語では「Ereignis」であり、辻村公一による邦訳（「時と有」、『思索の事柄へ』、筑摩書房、一九七三年、所収）では「性起」と訳されている。この訳語は、明らかに仏教的文脈との関係で選択されていると思われるので、ここではもう少しニュートラルな訳語として「生起」、あるいは単に「出来事」という訳語を当てておくことにする。

ハイデガーはこのテクストにおいて、まず存在の問題をドイツ語の「Es gibt」という表現から考えている。「Es gibt」とは英語で言えば「There is」、つまり「そこに…がある」という意味だが、文字通りに訳せば「それは（Es）与える（gibt）」という意味になる。ハイデガーは、「それ Es」を主語とするこの非人称構文「Es gibt」が「そこに…がある」、つまり存在を表す表現であることに注目して、次のように述べている。

> 存在それ自体をその固有性において思考することは、存在があらゆる形而上学におけるように、存在者から出発して思考され、また存在者のためにその根拠として基礎づけられる限りで、存在から目を転じることを要求する。存在をその固有性において思考することは、顕れのうちに覆蔵されて活動している《与えること Geben》、つまり「それは与える＝存在する Es gibt」のために、存在者の根拠としての存在を放棄することを要求するのである。存在は、「それは与える」の《与える Gabe》として、与えることに属している。存在は、与えることとして、与えることの外に追放されることはない。存在――つまり現前の中に展開されること――は別のものに変化する。現前の中に展開させられることとして、存在は顕れのうちに属し、この顕れを与えることとして、与えることのうちに留められている。存在はあるのではない［Sein *ist* nicht］。現前を顕わにすることとして、それが存在を与えるのである［Sein gibt Es］[3]。

一見すると難解な文章だが、実際のところ、述べられているのはさほど難しいことではない。「Es gibt」、つまり「そこに…がある＝それは与える」という表現に注目するなら、存在は「それは与える」の「与える」に属している。したがって、存在とは「ある Sein」よりも、むしろ「それが与える」によってその特質を示される、ということである。先に述べたように、これが非人称構文、つまり「それ」は「与える」であることに注目していただきたい。存在を与えるのは「それ」であって、

「それ」が何かは名指されていない。つまり、存在は「それ＝何か」によって被投的に「与えられる」のである。存在の持つこのような被投的性格についてはすでに『存在と時間』で展開されているが、ハイデガーはこのテクストにおいて、そのような性格を存在の「送り届け Schicken」と名づけている。

> ただその与えることのみを与え、しかしそのように与えつつ、自らを引きとどめ、自らを逃れさせるという仕方での与えること、このような与えることを私たちは《送り届け Schicken》と名づける。与えることのそのように考えられた意味に従えば、それが与える存在は送り届けられたもの［Geschickte］である。存在の歴史の歴史的性格は、送り届けの運命的性格［Geschickhaften eines Schickens］から定められているのであり、非限定的に理解された歴史的推移［Geschehen］から定められるのではない[4]。

つまり、存在とは「それ Es」によって、つまり私たちの統御できない何ものかによって「送り届けられている Geschickte」のであり、それは存在の「運命 Geschick」を表している。ここでハイデガーが強調しているのは、存在の運命性である。極めて暴力的に単純化するなら、私たちの存在がいまここにあって別の時間、場所にあるのではないという被投性を、ハイデガーは「送り届け Schicken」としての「運命 Geschick」という言葉遊びによって表現しようとしているのである。さらにハイデガーは、このように存在が被投的に生起することを「Ereignis」という言葉で表現している。

> 存在の運命を送り届けること［Schicken des Geschickes von Sein］、時間を届けること［Reichen der Zeit］のうちには、本来の所有者に与えること［Zueignen］と譲渡すること［Übereignen］とが、つまり、現前［Anwesen］としての存在と開けの場としての時間とをその固有性へと与え、譲渡することが示されている。両者を、つまり時間と存在をその固有性へ、つまりそれらが共に属することへと定めるもの、私たちはそれを生起＝出来事［Ereignis］と名づける。［……］「それは存在を与える Es gibt Sein」、「それは時間を与える Es gibt Zeit」において《与える geben》《それ Es》は、生起＝出来事として規定される[5]。

Ereignis とはここで、時間と存在がその固有な状態へと生起することを示している。「時間と存在」のフランス語訳は一九七六年に出版されているが、その訳注は、Ereignis の概念を次のように説明している。「通常の意味では、この語は出来事、

起こったことを意味する。ハイデガーはこの語を *er*-eignis、つまり固有に（eigen）その固有性へと至らせるものと理解している。Ereignen とは、「自己に至るまで生起させること」であり、その意味において、「自己へと生起させること」である」[6]。つまり、存在は「それ」によって被投的に「与えられ」、そのような被投性において固有の自己へと生起するのであり、そのような固有性の生起がここで Ereignis と呼ばれている。その意味で Ereignis は、単に「…が起きる」といった、日常的意味での「出来事」を意味しているのではなく、むしろ自己の固有性の生成を意味している。ただし注意すべき点は、ハイデガーにおいて自己の固有性は、あくまで「それ」によって「送り届けられた」「運命的な」ものだという点である。ここにおいて、自己の固有性は、「それ Es」によって受動的、被投的、運命的な形で規定されている。言葉を換えれば、自己の固有性の生起は「それ Es」によって「脱中心化されている」（ラカン）のである。

ここからわかるように、Ereignis とは、自らに備わっている固有性が自然発生的に「生起する」といった状況を指すものではない。ハイデガーによれば、自己の固有性は外的な「それ」によって「送り届けられている」のであり、その意味において、固有性の生起はまさしく自己に外的なものに依拠している。Ereignis の持つこうした性格を、マルクス主義哲学者ルイ・アルチュセールは「偶然性」として解釈した。一九八二年に書かれた「出会いの唯物論の地下水脈」というテクストの中で、彼はハイデガーの哲学を「偶然性の唯物論」として読み替えようとする。

> ハイデガーには、「es gibt」、「il y a」、「かく与えられている c'est donné ainsi」といった表現をめぐる一連の考察があり、それはエピクロスの着想に通じるものだ。「世界が、物質が、人間がある＝それがそこに世界を、物質を、人間を持つ Il y a du monde, de la matière, des hommes...」。es gibt の哲学、「かく与えられている」の哲学は、〈起源〉などに関するあらゆる古典的問いとの関係を一切清算する。そして、この哲学は世界の一種の超越論的偶然性［contingence transcendantale］を復活させる光景へと、視界を「開く」。私たちが「投げ入れられている」世界の超越論的偶然性であり、世界の超越論的偶然性は〈存在〉の開けに、〈存在〉の本源的欲動に、その向こうには探すべき何も、考えるべき何もない〈存在〉の「送り届け envoi」に送り戻される［renvoyer］。世界とは私たちに、このようなものとして与えられている「贈与＝与えること don」であり、私たちが選んだわけではない「事実中の事実」なのだ。この「事実」は、私たちの目の前で偶然性の事実性［facticité de la contingence］に、さらには事実性の彼方にさえ「自らを開く」。単なる確認であるのみならず、可能な〈意味〉のす

べてを律する「世界内存在」なるものの中で。「現存在 Dasein は存在の守人である」。そこではすべてが「現 da」にかかっている。このとき哲学にはいったい何が残るのか。しつこく、今度は超越論的な仕方で言えば、es gibt とその要件の確認である。あるいは、乗り越えがたい「所与性」のうちにある es gibt の効果である[7]。

アルチュセールによれば、ハイデガーの言う「Es gibt」は「かく与えられている」世界、私たちが「投げ入れられている」世界の超越論的偶然性を示している。つまり、私たちが自ら選択することのできない事実としての「偶然性」(「偶然性の事実性」としての世界)の中に投げ入れられていることを、ハイデガーは「Es gibt」から述べようとしたのである。そのとき「それ Es」は、このようにある世界の歴史的偶然性を指し示している。つまり、「Es gibt」とは、偶然的なるものが与えるの意なのである。アルチュセールはこのようにして、ハイデガーの「出来事＝生起 Ereignis」の哲学を「偶然性の唯物論」へと読み替えようと試みた。そして、そのような読解はまさしく「出来事 événement」の哲学の核心へと私たちを導いている。

2．ドゥルーズ／événement

私たちはここまでで、ハイデガーの「Ereignis」が、単なる「起こったこと」としての出来事ではなく、ある外的なもの(それ Es)の侵入の結果としての存在の生起を意味することを明らかにした。「ある外的なもの」をハイデガーは被投的な「運命性」と規定し、アルチュセールは「偶然性」と解釈している。ここから私たちは、考察の対象をドゥルーズの思想へと移し、彼がその哲学においていかなる「出来事 événement」概念を提起したかを考察してみたい。むろん、ハイデガーに倣って、ドゥルーズも「出来事」を単なる「起こったこと」とは定義しない。『意味の論理学』(一九六九)の中で、彼はストア派の哲学を参照しつつ、出来事を次のように定義している。

> ストア派の哲学者たちが行なっている操作は、まず第一に、因果関係にまったく新たな裂け目を作ることである。彼らは、因果関係の要素を分割し、各要素の側で統一性を作り直してしまう。彼らは原因を原因へと送り返し、原因相互の連結を確立する(運命[destin])。彼らはまた、結果を結果に送り返し、結果間に一定の結びつきを措定する。[……]こうして、自由は二つの補完的な仕方で救われる。一度目は、諸原因の連結としての運命の内部において、もう二度目は、

諸結果の結びつきとしての諸々の出来事［événements］の外面においてである[8]。

ドゥルーズは、ストア派の成し遂げたことは因果性に裂け目を作り、それによって原因と結果との関係を解体することだ、と言っている。つまり、諸原因から切り離された「諸結果の結びつき」こそが「出来事」なのである。ここからドゥルーズは「無限定の生成変化が出来事そのものになる［Le devenir-illimité devient l'événement lui-même］」[9]と述べている。つまり、出来事とは、原因－結果の連鎖を逸脱するような、「無限定の生成変化」なのである。

ドゥルーズにおいて出来事が「生成変化 devenir」（それは「マイナーなものになること devenir-mineur」、「動物になること devenir-animal」、「識別不可能なものになること devenir-indiscernable」といった概念として、ガタリとの共同作業――とりわけ『千のプラトー』――において変奏されていく）を意味するとすれば、そこから浮かび上がるのは次のような問いである。なぜ彼は「出来事」概念にこだわり続けたのか。言葉を換えるなら、なぜ彼は「出来事の哲学」を構築する必要を感じていたのか。そのような問いから私たちが想起するのは、ドゥルーズがガタリと共に書いた「六八年五月は起こらなかった」という短いテクストである。一九八四年に書かれたこのテクストは、フランスにおける六八年五月、つまり学生と労働者とが共に蜂起したいわゆる「五月革命」を最大限に評価し、反対に、七〇年代に急激に保守化したフランス社会を「六八年を同化することができなかったフランス社会の無能さ」と痛烈に批判している。そこでドゥルーズ＝ガタリは、六八年五月をまさしく「出来事」と規定している。ではそのとき、彼らはこの「出来事」概念をいかなるものとして提示するのだろうか。

> 一七九八年の革命［フランス革命］、パリ・コミューン、一九一七年の革命［ロシア革命］といった歴史的現象の中にはつねに、社会決定論や因果性のセリーに還元できない出来事［événement］とも言うべき部分が存在する。歴史家たちはこうした側面をあまり好まない。彼らは通常、ことが終わってから因果関係を復元しようとするからだ。しかし、出来事というものは、因果関係から外れるか、それとは断絶したものである。つまり出来事は、法則から分岐し、逸脱したものであり、可能なものの新たな領野を切り開く不安定な状態なのである[10]。

出来事とは、「因果性のセリーに還元できない」ものであって、それは「法則性から逸脱したもの」、「可能なものの新たな領域を開く不安定な状態」である。ここで触れられている「法則性」という概念について、マルクス主義的な革命の概念を想起

しておこう。マルクス主義において、革命は生産関係と生産力との矛盾によって引き起こされると考えられている。つまり、生産力が増大すればそれは必ず生産関係（資本－賃労働関係）と矛盾をきたし、必然的に革命を引き起こす、というのである。ここに見られるのはヘーゲル的な矛盾と止揚の弁証法であり、まさしく「法則性」の論理（資本主義の共産主義への「止揚」の必然性）である。それに対してドゥルーズ＝ガタリは、「出来事」を断固として法則性から切り離す。「出来事」とは、事前には予測不可能な仕方で、社会と個人にまったく新たな「可能なもの le possible」の領野を切り開く「生起」である。そして、このように生起した可能なものは、「社会の深みや諸個人の内部に浸透していく」[11]。その意味においてまた、出来事とは私たちの社会と私たち自身の存在様態を変容し、「可能なもの」へと開くような「無限定の生成変化」なのである。

六八年五月がそのような意味での「出来事」だとすれば、彼らはそれをいかなる点において評価するのだろうか。言い換えるなら、六八年五月の「可能性」とは何なのか。引き続き引用しよう。

> 六八年五月の出来事は、いかなる通常の、あるいは規範的な因果性からも解き放たれた純粋な出来事に属するものと言えるだろう。この出来事の歴史は一種の「不安定と変動の増幅の連続」に他ならない。六八年には実に多くの騒乱、思わせぶりな身振りや発言、愚かな行為や幻想が出現したのだが、それは大して重要なことではない。重要なのは、六八年五月に、ある透視力が出現したという現象である。つまり、一つの社会がそこに含まれている何か耐え難いものを突如として見出し、さらにはそれとは別の可能性をも見出したということである。それは「可能なものを求めよう、さもなくば窒息してしまう……」というかたちを取って現われた集合的現象である。可能なものは予め存在しているのではなく、出来事によって創造されるのだ。出来事は新たな存在を創造し、新たな主観性（身体、時間、性、環境、文化、労働などとの新たな関係）を生産するのである[12]。

彼らによれば、六八年五月の出来事性は、一つの社会が「耐え難いもの」を見出し、それとは別の新たな「可能なもの」を求めることで、新たな存在を創造し、新たな主観性を創造した、という点にある。「出来事」は新たな主観性を生産し、さらには新たな主観性に対応する「集合的アレンジメント agencement collectif」を形成する。この「新たな主観性」、新たな「集合的アレンジメント」が、社会と諸個人に根本的で、後戻り不可能な変化をもたらした、というのが彼らの見方である。七〇年代の保守化した社会が六八年五月の「出来事性 événementialité」を再び封じ込め

てしまったとしても、その出来事が生み出した「可能なもの」は、既に「社会の深みや諸個人の内部に浸透して」いるのである。例えば、六八年以後、社会の抑圧的な構造は一定程度において変容をこうむったと言うことができるだろう。それは、例えば年長者と年少者、男性と女性、教師と生徒、等々のあいだに介入する権力関係の様態の変化に見て取ることができる（日本における一九六九年も、ある程度においてそれとパラレルに論じることができる）。そして、それはまさしく可能態として次の世代へも受け継がれているのである。

ドゥルーズ＝ガタリは、六八年五月による社会の変化を「出来事」概念を用いて記述しようとした。もし私たちの社会がさらなる変革の可能性へと向けて開かれているとすれば、それは私たちが常に「出来事」の可能性に被投的かつ偶然的な仕方で曝されているからである。また、社会がその固有なものの再生産を果てしなく続けるのでなく、「可能なものの新たな領野」に向けて開かれているとすれば、それは「可能なもの」を欲望する創造性が「出来事」を生み出し、新たな主観性と社会的アレンジメントを生起させうる限りにおいてである。ここに私たちは、ドゥルーズ＝ガタリがハイデガー的「出来事 Ereignis」概念に与えた根本的な変化を見て取ることができる。つまり「出来事」とは、私たちの固有性を生起させる「運命的な」ものではなく、「無限定な生成変化」、つまり私たちと私たちの「集団的アレンジメント」に介入し、それを新たな「可能なもの」へと変容させうる偶然的で無限定な生成変化なのである。ここで「偶然的」とは、まさしく生成変化の様態があらかじめ何らかの形に「限定されていない illimité」こと以外を意味していない。言い換えるなら、生成変化は限界を持たない。ドゥルーズ＝ガタリが「出来事 événement」概念によって私たちに示しているのは、「出来事」によってもたらされる生成変化は後戻り不可能であり限界を持たない、ということなのである。

---

[1] 本稿はシンポジウム「ハイデガーとフランス思想」（京都大学、二〇〇七年九月二八日）において口頭発表された。本シンポジウムの企画者である合田正人氏、多賀茂氏に感謝する。

[2] 例えば以下を参照。Cf. Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 2001, S. 19-27, § 6 Die Aufgabe einer Destruktion der Gesichte der Ontologie. 邦訳『存在と時間』上巻、細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、一九九四年、六三－七七ページ、第六節「存在論の歴史の解体の課題」。

[3] Martin Heidegger, »Zeit und Sein« (1962), in *Zur Sache des Denkens* (1969), *Gesamtausgabe*, Bd. 14, 2007, S. 9-10. 邦訳「時と有」、『思索の事柄へ』、辻村公一他訳、筑摩書房、一九七三年、一二ページ。以後の同書からの引用は、辻村訳を参照しつつも私訳による。

[4] Ibid., S. 13. 邦訳一七－一八ページ。
[5] Ibid., S. 24. 邦訳三八－三九ページ。
[6] « Temps et être », in *Questions IV*, Gallimard, 1976; rééd. *Questions III et IV*, coll. « Tel », 1990, p. 227 note 10.
[7] Louis Althusser, « Le courant souterrain du matérialisme de la rencontre », in *Écrits philosophiques et politiques*, t. I, Stock/IMEC, 1994, pp. 542-543; 邦訳「出会いの唯物論の地下水脈」、『哲学・政治著作集』I、市田良彦他訳、藤原書店、一九九九年、五〇三ページ。
[8] Gilles Deleuze, *Logique du sens*, Minuit, 1969, p. 15. 邦訳『意味の論理学』上巻、小泉義之訳、河出文庫、二〇〇七年、二四－二五ページ。
[9] Ibid., p. 17. 邦訳二七ページ。
[10] Gilles Deleuze / Félix Guattari, « Mai 68 n'a pas eu lieu », in *Deux régimes de fous*, Minuit, 2003, p. 215. 邦訳「六八年五月［革命］は起こらなかった」、『狂人の二つの体制 1983－1995』、河出書房新社、二〇〇四年、五一ページ。
[11] Ibid., p. 215. 邦訳五二ページ。
[12] Ibid., pp. 215-216. 邦訳五二ページ。

要　　約

De l'*Ereignis* à l'événement — Sur la notion d'événement chez Heidegger et Deleuze

Yoshiyuki SATO

Dans cet article, nous discutons de l' « importation en contrebande » de la notion heideggerienne d'*Ereignis* et de sa transformation dans la pensée française post-structuraliste. Pour Heidegger, l'*Ereignis* ne signifie pas simplement « ce qui arrive », mais le surgissement de la propreté de l'être (*er*-eignen), qui est envoyé par le destin (*Geschick*). Définissant ainsi l'être comme envoyé, projeté et destinal, Heidegger décentre la modalité de l'être. Deleuze emprunte cette notion heideggerienne en la transformant radicalement. Pour ce dernier, l'événement (qui vient de l'*Ereignis* heideggerien) signifie le devenir aléatoire et illimité qui crée la nouvelle existence et la nouvelle subjectivité. Sous cette perspective, nous examinons la portée de cette notion deleuzienne en la rapportant à sa réflexion sur le mai 68.